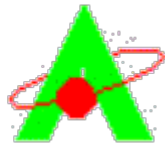


ぺれにある



2001年7月 No.増刊
北海道立天北農業試験場
〒098-5736 枝幸郡浜頓別町緑ヶ丘
TEL 01634-2-2111
FAX 01634-2-4686
<http://www.agri.pref.hokkaido.jp/tenpoku/>

牛、人、環境にやさしい「酪（楽）天ランド」を目指して

本誌「ぺれにある」が、天北地域で生育好適な優良草種であるペレニアルライグラスの「ぺれ」と、アルファルファの「ある」に大きな期待を寄せて創刊されてから8年目（創刊1994年7月）、通巻43号を迎えました。この間、酪農技術の向上を目指した情報誌として、直接酪農家の皆さんに読んで役立つ内容に心掛け、編纂に努力して参りました。今後とも、「継続は力なり」に徹して、皆様に役立つ情報誌として提供していく所存ですので、より一層のご支援、ご愛読をお願い致します。

さて、日本の一番北に位置する天北地域は、草地資源に恵まれた酪農を主体に、農家経営が営まれておりますが、さらにより一層酪農を発展させていくためには、草資源を最大限に生かした自然循環機能の高い酪農経営システムを確立して、低コストでゆとりある新しい酪農経営の育成をはかる必要があります。現在、その目的達成のため、当地方における集約放牧技術の確立による「安全」、「健康」、「資源循環」、「労働時間短縮」、「所得率向上」を目標に、牛、人、環境にやさしく楽しい酪農経営を目指した酪農王国・天北ランド実現のための技術開発に取り組んでおります。

これらの目的達成に向け、平成10年には、集約放牧技術に係わるこれまでの研究成果を取りまとめ、放牧割合別に経営モデルを作成し、さらに平成11年には放牧適性品種であるペレニアルライグラス「ポコロ」を育成いたしました。現在、これらのモデルや新育成品種であります「ポコロ」の活用を基にした技術の実証と経営評価について検討中で、平成13年度中には「天北版放牧導入マニュアル」を作成し、集約放牧技術の一層の普及促進に務める所存ですので、さらなる皆様方のご理解と、ご支援をお願い致します。

重点研究の内容紹介

牧草飼料科

来年度とりまとめ予定の研究内容をお知らせします。

1. チモシー（TY）中生品種「キリタツ」の栽培法

当地域において、刈取適期の拡大のためにも、TY中生品種「キリタツ」の作付けの拡大が望まれます。

この試験では当地域向けの「キリタツ」に適したマメ科草種・品種の組合せについて検討しています。すでに、根釧および十勝地域については結果が報告されていますが、これはそれらの当地域バージョンです。これからの「キリタツ」の作付けの拡大に寄与できるのではないかと考えています。

また、「キリタツ」主体草地の栄養収量を考慮した刈取スケジュールも提示したいと考えています。



2. ペレニアルライグラス（PR）の採草利用

PRは優れた栄養価や採食性から、放牧での利用だけではなく、貯蔵飼料としての活用も期待されます。

この試験では採草利用を行う場合の栄養収量も加味した、PRの持続性を低下させない刈取時期（刈取回数および生育期間）を検討しています。

また、サイレージを調製した時の飼料成分も例示できると考えています。

草地環境科

今、草地環境分野に向けられた酪農の大きな課題として、飼料自給率の向上と酪農周辺環境の保全があります。すなわち、良質の粗飼料をさらに安定的に生産していく技術と、環境を汚染させずに草地を維持管理する技術の両方が求められています。

ふん尿による環境汚染は、既に大きな社会問題となりつつあります。産出されたふん尿を施設等の整備により適切に管理することが重要です。ふん尿を環境容量の範囲で最大限に活用して良質粗飼料生産に生かすための技術開発に取り組んでいます。

1. 家畜ふん尿による環境汚染対策技術の体系化

ふん尿による環境汚染を未然に防止するためにも周辺環境のモニタリングが重要です。放牧地での環境負荷の実態を明らかにするために、モデル放牧地から水系への養分とくに硝酸態窒素の流出を調査し、適正な軽減対策に役立てます。

2. 家畜ふん尿主体の施肥設計システムによるふん尿高度利用技術の開発

現在のふん尿利用（圃場散布）率は、産出されるふん尿全体の5割程度であり、これを高める必要があります。このため、環境を汚染させない範囲での良質な牧草生産を念頭に置いた、経年草地に対する堆肥とスラリーの適切な施用時期を調べ、ふん尿主体の施肥設計システムを開発します。

3. 堆肥等有機物・化学肥料適正使用指針策定調査

上記の研究課題とほぼ目的は同じですが、本課題では草地更新時の堆肥施用限界量を求めています。

4. ペレニアルライグラス（PR）採草利用時の時期別窒素施肥配分設定

PRは高栄養の牧草であり、従来、放牧地での利用が推進されてきましたが、採草や兼用にも利用することにより、草地全般の一層の高品質化を図ることが望まれます。このための基本技術として、窒素肥料の効果的施用法を探っています。

技術普及部

技術普及部は専門技術員と研究員とで構成し、農業改良普及センターと連携して農業技術の普及と地域農業振興、及び地域に適合した農業技術の体系化を役割としています。

1. 宗谷管内酪農の動向

宗谷管内の乳生産は、生産調整下の平成5年の28万トンピークとして、現在まで今一步のところその水準を超えてはいない。ところが、他の主要な酪農地帯にあっては2年後に平成5年の水準を超えているのと違いが見られます。

こうした乳生産の停滞は、過去10年間で30%という高い農家戸数の減少と、フリーストールの普及率が低い（宗谷6%、全道10%）ことにみられる頭数規模拡大の遅滞によると思われます。離農率の減少あるいは地域酪農への就業促進のためには、儲かる、収益性の高い酪農を樹立することが重要となります。

天北地域において実現すべき経営タイプとして、中規模高収益酪農経営とフリーストール等大規模な酪農経営をその柱と考えています。その内容は、いずれも自給飼料を基本として、前者は経産牛50頭程度であっても高度な放牧飼養等による低コスト効果で、家族経営を十分成立させる高収益経営です。後者は大規模な投資を伴うが、省力システムの導入により多頭数飼養を可能とし高い労働生産性を実現する経営です。こうした視点に立って地域酪農振興を支援します。

2. 農業技術の体系化と現地実証

農業技術の体系化にあっては、全職員による技術体系化チームを組織し、収益性の高い集約放牧の技術実証と経営的評価に関する課題を平成11年から実施しています。放牧飼養を行っている宗谷管内12戸の酪農家に協力いただき、放牧酪農の草地管理、乳牛飼養のあり方など、放牧飼養に役立つ技術の体系化に取り組んでいます。この知見と成果は、今年度とりまとめ、来春公表する運びです。

もう一つの現地実証課題として、当场が育成したペレニアルライグラスの放牧適性新品種「ポコロ」について、現地農家での栽培を通して、導入・定着を図り、その優れた特性を実証する試験を実施しています。現在、いずれの試験栽培農家においても順調な生育を示しています。